



## 遺品や形見の持つ意味：対象喪失の心理

著者	池内 裕美
雑誌名	セミナー年報
巻	2006
ページ	139-152
発行年	2007-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/518">http://hdl.handle.net/10112/518</a>

# 遺品や形見の持つ意味 — 対象喪失の心理 —

池内 裕美

(ビジネス・エシックス研究班研究員)  
社会学部 助教授

## はじめに

我々は人生の中で幾度となく、大切なものとの別れを経験する。たとえば肉親の死、愛する人との失恋、可愛がっていたペットの死、住み慣れた家からの引越し、老化や病気による健康な肉体の喪失など、人生のあらゆる局面でその悲しい出来事は我々を待ち受けている。こうした大切な何かを失う体験を、精神分析学では「対象喪失 (object loss)」と称し、小此木 (1979, 1997) は「愛情や依存の対象を、その死あるいは生き別れによって失う体験」と定義している。また社会心理学の領域では、Harvey (1996) が「喪失 (loss)」として「人の資源において、重大な減少を伴う出来事」と定義し、それは死、離婚、トラウマを引き起こすような負傷、戦争、暴力、そして集団殺戮をも包含する概念であると唱えている (Harvey, 2002)。

本論では、まずこうした対象喪失に関する既存研究を概観する。そして後半では、喪失後に直面する遺品や形見の問題について焦点を当て、池内 (2005a, 2005b, 2006) の量的・質的の両側面から取り組んだ実証研究を中心に論を展開していきたい。

## 1. 対象喪失の心理

喪失研究は、精神分析学者のフロイト (Freud, S.) が、論文「悲哀とメランコリー」の中で、喪失後に生じる心の営みを「モーニング・ワーク (mourning work: 喪の仕事)」と称したことに端を発する。この喪失後の心理的反応は喪失研究の最も中心的な課題とされ、これまで多くの段階モデルが提唱されている。たとえば Bowlby (1961) は、母親を失った乳幼児が示す感情を観察した結果、モーニングの過程として抗議→絶望→離脱<sup>1</sup>の3段階を見出している。

---

1 Bowlby (1961) は、母親を失った乳幼児が示す感情の観察を通して3段階のモーニングの過程を提唱している。「抗議 (protest)」とは、対象を失ったことが信じられず、必死になって取り戻そうとする段階、「絶望 (despair)」とは、失った対象と再び結びつこうとするが、やがてそれが無駄であることを知り、激しい絶望感に襲われる段階、「離脱 (detachment)」とは、対象に興味を失って忘却したかのようになり、やがてそれに代わる新しい対象を発見し、心を再建する段階として各々規定されている。

またKübler-Ross (1969) は、末期癌患者約200人へのインタビューを通して、死を宣告されてから死に行くまでの過程を分析し、死の否認と隔離→怒り→取り引き→抑うつ→受容といった5段階モデル<sup>2</sup>を提唱している。その他、日本では松井・鈴木・堀・川上 (1996) が災害遺族への面接調査を通して、精神的打撃と麻痺に始まり希望に終わる9段階モデル<sup>3</sup>を、平山 (1997) は正常な悲哀過程として、パニックに始まり自立・立ち直りに終わる7段階モデル<sup>4</sup>をそれぞれ見出している。その一方、段階説に対しては痛烈な批判もあり、たとえばWortman & Silver (1989) は、全ての人が全く同じ立場で喪失を経験し、処理していくと考えること自体、非現実的であると指摘している (詳しくは、池内・中里・藤原 (2001))。

それでは一体、どのような要因が喪失からの回復過程に違いを生じさせるのであろうか。たとえば小島 (1991) は死別による悲哀の過程に影響を及ぼす諸要因として、①死別した対象との関係、②死別のタイプ、③死因、④死の状況、⑤残される人の特性の5つにまとめている。Harvey (2002) も同様に死別による悲嘆の程度や深さを増幅させる原因として、①予期していなかったこと、②突然であったこと、③失った人が比較的若かったこと、④二人の間の絆が非常に強かったことなどを挙げている。また池内・藤原 (2002) は、実際に一般市民397名に質問紙調査を行った結果、回復期間の長さに影響を及ぼす喪失関連要因として、①重大さの程度、②喪失予期の有無、③原因の有無を見出している。すなわち、当該喪失体験が自分にとって重大であると認識しているほど、また喪失予期が無く、原因が自分にあると思っっているほど、悲嘆からの回復に要する時間は長くかかることを見出しており、特に「予期悲嘆 (anticipatory grief)」の重要性を指摘している。予期悲嘆とは、「喪失が予期される場合、実際に喪失以前に喪失に伴う悲嘆が開始し、喪失に対する心の準備が行われること」と規定されており、平山 (1997) によると、特に死別からの回復において予期悲嘆の有無が重要になると言及されている。つまり、予期悲嘆を体験すると、現実の死別以前にある程度心の準備ができるため、実際の喪失後に生じる悲嘆からの回復が比較的速くなるというのである。

---

2 Kübler-Ross (1969) の提唱した各段階は、以下のように説明されている。①否認と孤立：予期しない衝撃的なニュースに接して、そのショックをまともに受け入れられずに、まず否定しようとする段階。②怒り：死という現実を認めざるを得なくなると、「なぜ自分だけがこんな目にあわなくてはならないのか」と、怒りや恨みの感情が起る段階。③取り引き：神や仏に対して、自分がどうしたら延命できるか取り引きし始める段階。④抑うつ：取り引きをしても無駄であることを知り、気持ちが減入ってうつ状態になる段階。この段階では、病気が進行し衰弱が進んで無力感が深刻となると同時に、この世との別れを覚悟するために、他人から癒されることのない絶対的な悲しみを経験することにもなる。⑤受容：長い旅の前の最後の休息の時間が訪れたかのような諦めの心境に至り、来るべき自分の終焉を静かに見つめることのできる段階。

3 松井ら (1996) の提唱した9段階モデルとは、「①精神的打撃と麻痺→②精神的パニックと不安→③否認→④怒りを中心とする強烈な情動→⑤思慕と探求→⑥混乱と抑うつ→⑦死の意味の探求・死の社会化→⑧あきらめと受容→⑨希望」である。

4 平山 (1997) の提唱した7段階モデルとは、「①初期 (パニック) →②第Ⅰ期 (苦悶) →③第Ⅱ期 (抑うつ) →④第Ⅲ期 (無気力) →⑤現実直視→⑥見直し→⑦自立・立ち直り」である。

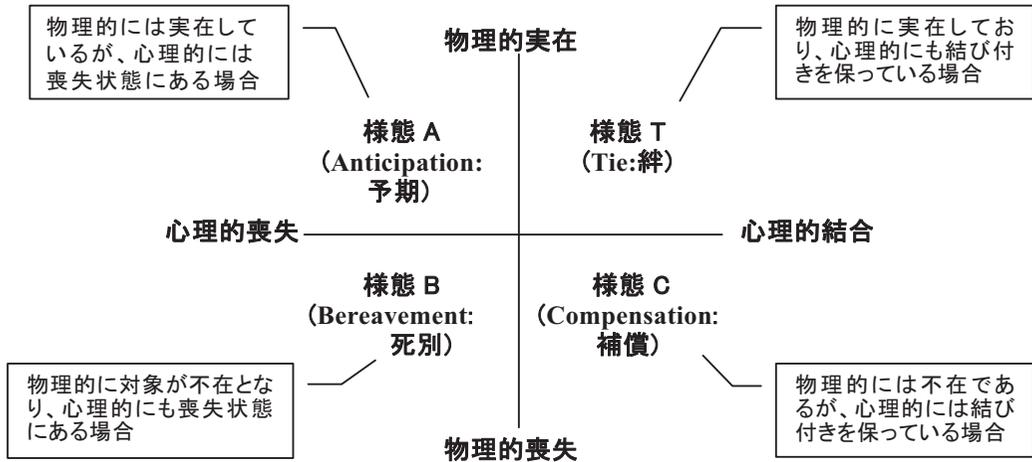


Figure 1 喪失の様態分類 (山本 (1991)、池内 (2002) より転載)

喪失の予期については、山本 (1991) が提唱した 4 分類も非常に興味深いので簡単に紹介しておこう。山本 (1991) は、「物理的喪失」の有無と「心理的喪失」の有無といった 2 軸を用いて喪失の様態を 4 つに区分している (Figure 1 参照)。そして物理的には実在しているが、心理的には喪失している状態を、特に「予期様態」と呼んでいる (なおフロイトは同様の様態を「内的対象喪失」(幻滅など) と称している)。また、物理的には不在であるが心理的には結びつきを保っている様態を「補償の様態 (compensation)」と呼び、人は喪失による外的な世界での心の痛みを緩和するために、内的な世界では対象を創造的に再生し、破壊された心と絆を修復しようとする主張している。しかし、この傾向が極端になると、喪失の事実を否認し、心の中に妄想-幻覚的な形で喪失対象を蘇らせることもある。つまり喪失対象が心の中で「ミイラ」となり、本物の内在化と対象からの離脱が出来なくなってしまう、これを特に「病理的な補償の様態」として通常の補償の様態と厳密に区別している。

ところでこれまで当たり前のように「回復」という語を用いてきたが、そもそも“喪失から回復する”とはどういうことであろうか。この点に関して池内 (2006) が質問紙調査を実施したところ、「回復」の意味としては、“喪失対象のことを思い出さなくなったこと”、“前向きな気持ちになった”、“もう戻らないと割り切ることができるようになった”といった回答が上位にくることを見出している。これは Worden (1991) の悲哀の終了に関する主張を支持するものとなっている。Worden (1991) は、悲哀の仕事が終了する時期の指標として、“死者を苦悩なく思い出せるようになったとき”、“死者を思い出しても、号泣したり胸が締め付けられたりするような身体的反応がなくなったとき”といった要因を挙げている。こうした喪失からの「回復」を定義することは困難な作業であるが、実証的に喪失を研究する上では非常に重要な問題といえるであろう。この問題については、今後継続して検討していく必要があると思われる。

## 2. 形見に関する心理学的検討：量的調査より

### 2-1 目的

我々は大切な人と死別あるいは離別した際、その人との関係はそこで完全に終わると考えるであろうか。Harvey, Flanary, & Morgan (1986)によると、重大な喪失は喪失対象との物理的関係が終結しても心理的関係はなおも継続し、残された人々の日常の思考や行動面において影響をおよぼし続けると言及されている。また、上述したように山本(1991)も、人は内的な世界では対象を創造的に再生し、破壊された心と絆を修復しようとするとして述べている。つまりこれらの主張の意味するところは、“物理的な喪失＝関係の終結”とはいえないということであろう。そして喪失対象を“具現化”し、関係を継続するために非常に重要な役割を果たすものの一つが、まさに遺品や思い出の品、形見(以下、「形見」に統一)であると思われる。

ところで形見とは、辞書によると「過去を思い出す“よすが(縁)”となるもの」と記載されている(新村, 1998)。この説明をみても、形見が喪失対象との関係継続に不可欠であることが推察できよう。たとえば子供を失った遺族には、その子の部屋を生前のままにし、喪失後も“故人と共に生きる”人も多い。こうした形見は、残された者の心を支えるといった肯定的な機能を果たす反面、日常への再適応を妨げるといった逆機能も考えられるが、その本質は未だ明らかではない。そこでこうした形見の心的機能について、池内(2005a, 2006)が行った質問紙調査を紹介しながら考察していきたい。

### 2-2 方法

- 調査方法：郵送法による質問紙調査(500円図書券同封)
- 調査項目：(本論に関連する箇所のみ抜粋)
  1. 喪失体験に関する質問項目：
    - 1) 過去の喪失体験および最も心に残る体験、2) 悲嘆からの回復の有無、3) 回復に要した期間、回復したと思える理由(自由記述)
  2. 形見に関する質問項目：
    - 1) 喪失対象との関係を象徴するような思い出の品(形見)の有無、2) その内容、3) 手放さない理由と手放さないことに関する評価、4) 処分した理由
  3. デモグラフィック要因に関する質問項目：
    - 1) 性別、2) 年齢、3) 配偶者の有無、4) 職業、5) 住居 他
- 調査対象：Ipsos日本統計調査株式会社モニターを対象。予備調査で“郵送調査に協力してもよい”と回答した1193名から437名を有意抽出。回収数397名(回収率：90.8%)  
構成：男性169名(42.57%)、女性227名(57.18%)、不明1名、

平均年齢：39.55歳（SD = 13.91, 年齢幅：18～65）。

- 調査時期：2004年10月29日～11月14日（予備調査のオムニバス調査は2004年7月に実施）

### 2-3 結果と考察

重大な喪失体験が“大切な人との死別・離別”と答えた242名のうち69.0%（167名）が、未だ形見を保持し続けており、特に男性に比べて女性の方がその割合は有意に高くなることが見出された（ $\chi^2(1) = 4.26, p < .05$ ）。なお、男性では保持：59名（64.13%）、処分：33名（35.87%）、女性では保持：108名（76.60%）、処分：33名（23.40%）となっている。

ところで、この男女差の源泉はどこにあるのだろうか。その一因として、そもそも形見を含めモノそのものに対する意味づけが、男女で異なっているのではないかと考えられる。たとえばDittmar（1989, 1991, 1992）は、所有物に愛着を抱く理由を男女で比較したところ、男性は道具的・実利的な機能を、女性は対人関係の象徴としての機能や情緒と関連した機能を重視することを見出している。本調査においても、女性の方が喪失対象の幻影や思い出を形見にもとめる傾向が強いために、こうした男女差が生じたものと考えられる。

また“保持”と答えた人に具体的な内容を尋ねたところ、写真・アルバム・プリクラが109と最も多く、以下、衣類・着物：32、手紙・メール：20、時計：16、プレゼント：14、指輪などの装飾品：11と続いていた（Table 1 参照）。さらになぜ形見を手放さないのかについては、半数近くの人が“失った対象のことを忘れたくない”ことを、また20%近くの人が“心の支え

Table 1 手元に残している思い出の品

項目	回答数
写真・アルバム・プリクラ	109
衣類・着物	32
手紙・メール	20
時計	16
プレゼント	14
装飾品（指輪、ネックレス等）	11
失った人が作ったもの	9
カバン・財布	8
道具類	6
カセットテープ・ビデオテープ	5
本・雑誌	7
服飾品（ネクタイ、スカーフなど）	4
CD	3
お守り	3
飾り物	3
家具類	3
その他少数意見	63
合計	313

Table 2 形見を手放さない理由

項目	人数	%
失った対象のことを忘れたくないから	76	45.51
心の支えとなっているから	33	19.76
特に深い理由はない	20	11.98
そのモノ自体が気に入っているから	9	5.39
処分する気力がないから	6	3.59
日々の生活に役立つものだから	4	2.40
失った対象が戻ってくると信じているから	2	1.20
処分するのが面倒だから	1	0.60
その他	16	9.58
合計	167	100.00

Table 3 形見を処分した理由

項目	人数	%
自分の気持ちの整理のため	20	31.25
いつの間にかなくなってしまった	10	15.63
処分したことにに関して特に深い理由はない	9	14.06
失った対象のことを少しでも早く忘れたいから	6	9.38
持っただけでも困る	3	4.69
単に片づけがしなかったから	1	1.56
その他	15	23.44
合計	64	100.00

になる”ことを理由として挙げていた（Table 2 参照）。

形見を処分した理由については、約30%の人が“自分の気持ちの整理のため”と答えていたが、その一方で“いつの間になくなってしまった”、“特に深い理由はない”とする人がそれぞれ約15%いた（Table 3 参照）。以上、これらの調査結果をみると、確かに形見には喪失対象との関係を心理的に継続、あるいは終結させる機能があることが分かる。

さらに本論では、「大切なモノの価値を測定する尺度（池内・藤原・土肥（2000）の抜粋版16項目）」を用いて、より直接的に形見の価値を検討した。因子分析（主因子法、プロマックス回転）の結果、形見には大きく分けて4つの価値<sup>5</sup>があることが見出された（Table 4 参照）。そして各因子ごとに簡便的因子得点（尺度得点の平均値）を算出したところ、「関係性の象徴的価値」すなわち“喪失対象との関係を象徴するような機能”と「情緒的価値」すなわち“心を支える機能”が比較的強く付与されていることが見出された（機能的価値： $M=1.97, SD=1.14$ 、自己呈示的価値： $M=1.63, SD=.80$ 、関係性の象徴的価値： $M=3.71, SD=1.19$ 、情緒的価値： $M=2.62, SD=1.05$ ）。

Table 4 形見の価値に関する因子分析結果（主因子法、プロマックス回転）

項 目	I	II	III	IV
④ それがなくなると、私の生活は非常に不便になる	.955	-.129	.039	.015
⑬ それは、私の生活において実用的な役割を果たしてくれる	.851	-.054	-.124	.128
⑫ それは、やりたい事、やるべき事の道具として欠かせないものである	.846	.149	-.001	-.046
⑤ それは、ある特定の目的を果たすために欠かせないものである	.759	.116	.102	.020
⑥ それがあることで、他の人の羨望を得ることができる	-.056	.933	-.112	.088
⑭ それがあることで、私は優越感に浸ることができる	.000	.877	.030	-.093
⑯ それのおかげで、私は他の人の注目を集めることができる	-.027	.687	-.117	.080
⑦ それは、私の魅力を引き出してくれる	.116	.643	.166	-.120
⑪ それは、ある特定の経験や出来事の思い出を象徴するものである	.177	-.104	.833	-.158
⑨ それは、ある特定の人との思い出を象徴するものである	-.042	.013	.771	-.027
⑧ それは、お金には換え難いものである	-.085	.023	.711	.197
⑮ それは、世界に1つしかないといえる	-.196	.029	.542	.317
② それがあることで、寂しさを紛らわすことができる	.091	-.073	-.132	.905
① それは私の心の支えとなっている	-.115	-.017	.048	.833
③ それは、私自身の考え方・生き方に大きな影響を与えてくれる	.186	.087	.137	.496
⑩ それは、私のストレスを解消してくれる	.169	.071	.085	.455
因子間相関	I (機能的価値)	.501	.027	.149
	II (自己呈示的価値)		.169	.313
	III (関係性の象徴的価値)			.615
	IV (情緒的価値)			
	$\alpha = .927$			
	$\alpha = .849$			
	$\alpha = .834$			
	$\alpha = .813$			

5 ①関係性の象徴的価値（形見が他者との結びつきの証になるという価値）、②自己呈示的価値（形見が自分を他者にアピールする際の手段として働く価値）、③情緒的価値（形見が情緒的な安心感、喜び等を与えてくれるという価値）、④機能的価値（形見が目的を果たすのに機能的に役に立つであろうという価値）

### 3. 形見に関する心理学的検討：質的調査より

#### 3-1 目的

本項では、上記の質問紙調査の内容をより深く探求するために行った池内（2005b）の個人面接調査結果を中心に論及する。まず面接調査の主目的は、喪失対象が喪失後の継続的関係の中でどのような意味を持ち、またそうした継続的関係形成において形見がいかなる機能を果たしているのか検討することにあった。データの分析法には、木下（1999, 2003）によって考案された質的研究法の一つ「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach: M-GTA）」が用いられた。“修正版”とあるのは、オリジナル版、すなわち米国の社会学者グレイザーとストラウス（Glaser, B. & Strauss, A. L.）によって考案された「グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、GT法）」を、より実践で使いやすいよう修正したことによる。GT法とは、データに密着（grounded）した分析から独自の説明概念を作り、それらによって統合的に構成され、説明力に優れた理論の生成を目指す技法である（木下、2003）。日本では「データ対話型理論」として、近年、看護や医療、福祉などの実践領域で非常に注目をあびている。

なお、M-GTAの分析上の最重要点は、以下の3点にある。1)データのコーディングと深い解釈とを一体で行うこと、2)分析に当たっては理論の生成よりもデータに密着している点（grounded on data）が優位であること、3)分析結果は、生成した概念と、概念間の関係であるカテゴリー、およびその相互の関係を網羅的にひとつのまとまりに仕上げたもの（説明図）で表現すること（木下、2003）。

#### 3-2 方法

- 調査方法：個人面接調査（半構造化面接）
- 被面接者：Ipsos日本統計調査株式会社のモニターを対象とて、2004年7月に実施したオムニバス調査において“面接調査に協力してもよい”と回答し、また“重大な喪失体験がある”と答えた近畿圏在住の18名（男性6名、女性12名、年齢幅19歳～62歳）
- 面接時期：2004年12月
- 面接場所：日本統計調査6階モニタールーム
- 面接方法：面接は、著者と面接の訓練を受けた研究協力者のうちのいずれかが行った。最初に過去の喪失体験を質問した後、その中で最も重大と思う喪失体験について、喪失後の心理的反応や喪失対象に対する現在の心境を中心に語ってもらった。面接方法は半構造化面接であり、面接の様子は被面接者の許可を得た上で全てICレコーダーと記者によって記録され、後に逐語録として書き起こされた。また面

接時間は、一人につき40分～60分間であった。

- 分析方法：M-GTAの分析手順にしたがい、まず一人分のデータ（逐語録）に目を通した後、本研究テーマと関連のありそうな箇所に着目し、概念を生成し定義づけ、具体例も含めて「ワークシート」（修正版の特徴で一概念ごとに作成）に記入。その後、次々と他のデータに目を通し、コンテキストの意味を解釈しながら類似例あるいは対極例と比較（継続的比較分析）して、概念をより精緻化・追加し、ワークシートを完成させた。そして一通り概念が出尽くした時点で「理論的飽和化」に達したと判断し、関連のある概念同士を集めて「カテゴリー」を作成して、最終的にカテゴリー間の関係性を図式化した。

### 3-3 結果と考察

本研究では18名に対して面接を実施したが、研究目的上、“大切な人との死別・離別”を人生最大の喪失体験と答えた12名（Table 5 参照）に絞って詳細な検討を行った。特に形見（遺品や思い出の品）を保持し続けている人を、木下（2003）のいうところの「分析焦点者」とした。また、分析に用いるデータも本研究目的と関係のある「喪失対象との関係の継続」や「形見」について述べられている箇所を中心に検討を試みた。参考までにインタビューにおける発言例を一部紹介しておく。なお、文中下線部が特に形見に対する意味づけと関係する箇所である。

#### ■37歳男性：親友と死別（鉄道事故）

「彼が亡くなって、まあ遺品とかね、服でも靴でもそうですけど、ご両親から「これ合うんやったら着、着いひん？」とかってもらった物はあります。……（略）……使ってましたね。浮かばれると思って。靴とか、（笑）もらった靴とかはいてたり。後、カバンとか、……（略）……使ってボロボロになったカバン捨てはしてないですね。置いてはいますよね。なんか捨てるのはさすがにどうかなっていう気もして……。」

#### ■62歳女性：夫と死別（病死）

「アルバムをこの間も全部ちょっと整理をしてね。お父さん一人写ってる写真ばっかしを1冊にしてね。……（略）……心の整理みたいなもんですかね。……（略）……私今日も、お父さんのタイピンをつけてるんですよ。なんか一緒にいるような感じ。だからどっか行く時にやっぱり持って行ってあげようかとか思って。うんやっぱし免許証なんか写真一枚入れてるとか……。」

分析の結果、全部で下記の4カテゴリーが見出された。

- ① 悲嘆と戦うプロセス（=新しい環境への移行過程）

Table 5 本研究の面接者一覧（分析対象者のみ）

	性	年齢	重大な喪失体験	喪失状況	喪失時期	回復	予期悲嘆
A	男	22	恋人との離別	相手から	約2年前	△	有
B	女	42	友人との離別	自然消滅	約25年前	×	無
F	女	19	祖父との死別	突然死	約7ヶ月前	△	無
G	女	34	友人との離別	自分から	約9ヶ月前	△	有
H	男	62	兄との死別	病死（癌）	約8年前	△	有
I	女	62	夫との死別	病死（心臓）	約1.5年前	△	有
J	男	37	友人との死別	鉄道事故	約7.5年前	△	無
K	女	21	恋人との離別	相手から	約3.5年前	○	有
L	女	36	友人との死別	殺害（絞殺）	約2年前	×	無
P	男	34	恋人との離別	相手から	約半年前	×	無
Q	男	39	祖父との死別	病死（老衰）	約8ヶ月前	○	有
R	女	21	祖父との死別	突然死	約6年前	○	有

注) 網掛け(A、G、H、I、Q)の喪失体験は「予期悲嘆」があった人

- ② 思い出の品の「移行対象<sup>6</sup>」化
- ③ 喪失対象との新たな関係形成プロセス
- ④ 形見（遺品・思い出の品）への意味づけプロセス（＝喪失対象の具現化の過程）

また、概念については18個が生成され、各概念およびカテゴリー間の関係はFigure 2のように整理された（紙面の都合上、各概念の生成プロセスは省略）。この関連図について重要な知見を整理すると次の4点になろう。このうち特に形見と関連深いものは(2)と(4)の知見である。

- (1) 予期悲嘆の有無がその後の悲嘆プロセス・回復の有無と関連
  - ・予期悲嘆があると、その後の悲嘆はやわらぎ (②)、無気力 (④) や後悔の念 (⑤) も起きにくく、反対に冷静・客観視 (⑦) が生じやすくなる。
- (2) 回復に向けて形見（遺品や思い出の品）が「移行対象」として機能：この知見は、心のどこかで喪失の事実を認めたくないという気持ちが背景にあり、特に突然死・事故死に典型的なものと考えられる。
  - ・完全には立ち直れていない人は、形見の存在によって心が支えられること (⑩) を言及。
  - ・悲嘆プロセスで奇跡への希望 (⑥) を抱いた人は、回復が抑制され、形見によって関係維持 (⑨) を図ろうとする。なお、これは形見の逆機能説を支持するものといえよう。
- (3) 回復している人は喪失によって得た教訓について言及し、喪失対象との新たな関係を形成。
  - ・完全に回復している人は、喪失によって得たもの (⑮) について言及しているが、その内容によって若干その後の関係（＝喪失対象の意味づけ）が異なる。
- (4) 喪失対象との新たな関係構築後、あるいは回復の過程で形見は様々な意味づけがなされ

6 移行対象 (transitional objects) とは、「乳幼児が特別の愛情を寄せる“自分でない”最初の所有物」のことであり、母子分離などの状況で不安を軽減する働きがある (Winnicott, 1971)。

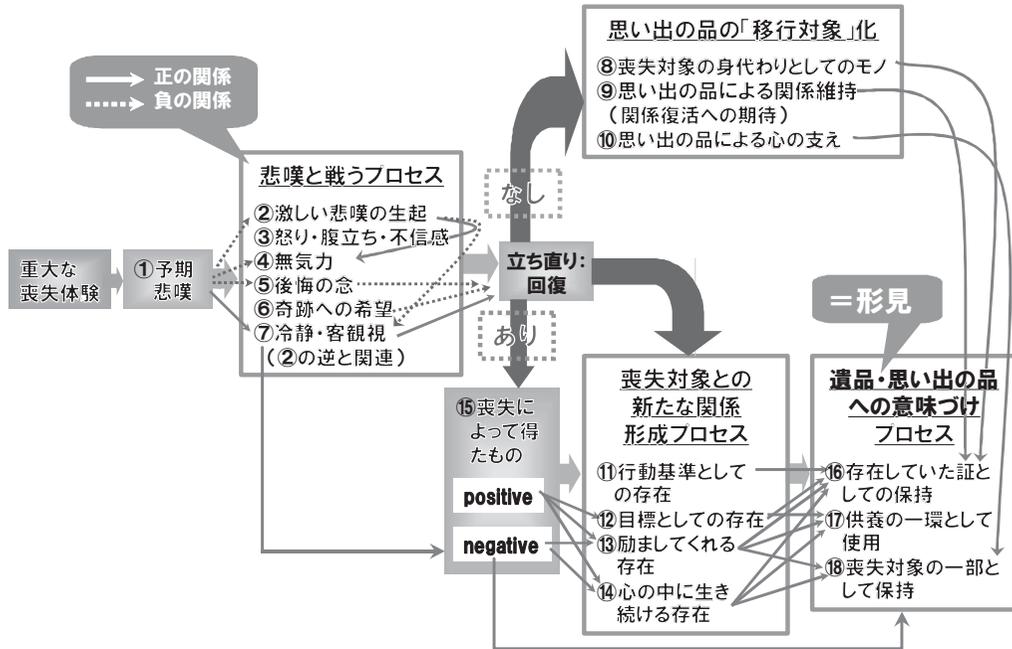


Figure 2 グラウンデッド・セオリーによる概念間およびカテゴリー間の関連図

る。

- ・喪失対象が励ましてくれたり (13)、心の中に生き続ける存在 (14) の場合、遺品を使用すること自体が供養につながる (形見→供養のための手段・道具) と言及されている。
- ・また形見は、存在していた証 (16)、喪失対象の一部 (18: 具現化するもの)、喪失対象の身代わり (8) といった役割を果たすことも示唆されている。

本研究では、面接で得たデータを完全に質的な方法論に基づき分析した。それゆえ解釈が恣意的になっている点は否めない。今後はスーパーバイザーの意見を聞きながら、Figure 2 のモデルをより精緻化していく必要があると思われる。またその際、本研究では形見を保持し続けている人に焦点を当てたが、対極例 (処理した人) や今回用いなかった概念、さらには死別・離別以外の体験者のデータなども用いて、より一般化可能なモデルの提唱を課題としたい。

## おわりに：形見に関するこれまでの研究のまとめ

本論では、まず対象喪失に関する既存研究を概観し、その後、遺品や形見の問題に焦点を当て、池内 (2005a, 2005b, 2006) の実証研究を中心に論及してきた。実証研究についてより具体的には、形見が喪失悲嘆からの回復にいかにか肯定的、否定的な役割を果たしているのか、すなわち形見の心的機能について量的・質的両側面から検討することを試みた。ここではこれら

の結果を再度概観し、総合的な視点から考察していきたい。

まず質問紙調査では、形見の内容や有無、さらにはその理由などについて多面的に検討した。そして、形見の機能については主に情緒的な安心を与えてくれる「情緒的機能」と他者との結びつきの証となる「関係性の象徴的機能」があり、特に後者の機能が典型的であることが見出された。また個人面接調査では、形見は残された者の心の支えになることが示唆された。その理由は、形見には喪失後の回復過程に応じて“喪失対象の身代わり”、“喪失対象との関係維持の象徴”、“悲嘆を軽減してくれる心の拠り所”、“喪失対象が確かに存在していたという証”、“喪失対象の一部”などの意味づけがなされるからと解釈される。

しかしその反面、形見は“奇跡への希望”を抱いている人にとっては逆機能、すなわち回復をより困難にするといった負の働きを併せ持つことも示唆された。この逆機能の存在は、日航機御巣鷹山墜落事故の遺族の声を集めた文集『茜雲』（8.12連絡会, 2005）の中の、形見に関する記述をみても明らかとなろう。たとえば小学生の息子を亡くした女性は、一周忌を迎える時になっても、机の上や庭に転がっているバットやボールさえ事故当時のままで保持（保存）し続け、なかなか息子の死を受け入れられない様子を訥々と綴っている。さらにその女性は、季節が変わるときに衣料箱からセーターやタンクトップなどを取り出すことが、息子の匂いを感じて怖いと嘆いている。ちなみに、形見に対して“怖い”という表現を用いている人は、この女性に限ったことではなく、本研究の面接調査協力者の中にも少なからずみられる。たとえば突然友人を殺害された女性は、その友人から貰ったカセットテープを形見として保持しつつも、中身を聞いたなら本人の声が聞こえてきそうで怖くて聞けないと語っている。

さて、形見の逆機能に話を戻すが、御巣鷹山の事故で夫を亡くしたある女性は、事故後一年以上経ってからも、“彼がいつもそばにいてくれるから”と夫の服を着続けている。しかし、心から楽しいと思った日は一日もなく、今すぐにでも夫のところへ行きたいと切々と訴えている。これは亡き夫のモノを身につけることでますます夫の幻影から逃れられなくなり、結果的に喪失対象が心の中でミイラ化してしまうという、まさに形見の逆機能が作用している状態ともいえよう。なお、形見を肌身離さず持ち歩くといった行為自体は、先に紹介した池内（2006）のインタビューの発言例でも語られている（死別した夫のタイピンをつけることによって、夫との同一化を図ろうとする女性）。御巣鷹山墜落事故の遺族の記述は、“大切な人を突然の大惨事で亡くし、完全遺体との対面すら難しい”という非常に特殊なケースに関するものではある。しかし、こと形見に関する記述は、本研究の調査協力者の語りと重なる部分が少なからずみられる。したがって本論で扱ったような通常の死別・離別体験においても、同様の心情が生じているものと考えられよう。

ところで、形見は喪失対象の身代わりとして、残された者の心の支えになることが見出されたが、そもそもなぜモノが人の“身代わり”となり得るのであろうか。この点については、特に文化人類学の「アニミズム」的世界観が有益な示唆を与えてくれるであろう。アニミズム

(animism) とは、生物・無生物を問わず自然の万物すべてにおいて靈魂 (anima) が存在するという信仰のことである。アニミズムの語と概念の創始者であるタイラー (Tylor, E. B.) は、アニミズムを“すべての事物には靈的存在がある”という原始的信仰として捉え、これをもって宗教の起源とみなした (村武, 1997)。特に日本人は、こうしたアニミズム的な感性が強い民族であると指摘されている (ベンダサン, 1979)。

また、Beaglehole(1932) は、伝統的な社会に住む人々の魔術的でアニミズム的な習慣を調べ、アニミズム信仰のある社会では、武器や食事のための道具といった大切なモノは、他者からの汚染を避けるために一切他者には触れられず、また所有者の死後は、所有者と共に葬られるという習慣があることを発見した。故人が残した形見に対する習慣や心情も、このアニミズム精神、すなわちモノには所有者の魂が吹き込まれているといった観念の一つの現れであるといえよう。それゆえ形見は重要視され、故人と共に棺に入れられたり、故人の代用として大切に保管されたり、時には関係を断ち切るために処分されたりするのではないかと考えられる。なお、先のベンダサンの指摘によると、その傾向は特に日本人に強いものと推察できるが、この点については今後、検討の余地が残されている。

「アニミズム」については、心理学の領域、とりわけ発達心理学の領域でも、上記と極めて近い意味で同一の概念が用いられている。幼児は全ての事物を、あたかも魂 (心) を持つ存在として擬人化する傾向にあるが、心理学の領域ではこうした幼児期の思考様式のことを「アニミズム」として捉えている。これは「物活論」とも訳され、上記タイラーの概念をもとにピアジェ (Piaget, 1964) が提唱したものである。典型的な例としては、子供が太陽や道端の花、そして自分の玩具やぬいぐるみ等にも感情があると信じて振舞う姿を挙げることができるであろう。この心理学的な意味でのアニミズム精神は、幼児期のある時期にだけ現れる特質であるという見方がなされている。しかし、池内 (2006) の面接協力者の多くが、“形見は所有していた故人自身あるいは故人の一部である”と語っていたことより、成人になっても一時的に復活する可能性があると考えられる。

それでは、なぜ成人にもアニミズム精神が一時的に生じ得るのであろうか。その理由の一つは、「退行」といった概念を用いて説明できるであろう。人は極度の不安状態に陥ると、すでにある段階に到達した精神が、心理的安定を求めてより未発達な段階に逆戻りすることがある。この現象を臨床心理学や精神分析学では「退行 (regression)」とよんでいる。俗にいう「子ども返り」であり、弟や妹の誕生後に今まで出来ていたことが出来なくなること、夜尿や指しゃぶりが再発することなどがこの典型とされている。ちなみに心理学者のレヴィンは、何らかのフラストレーションによって行動や思考が一時的に未分化な原始的状態に戻ることを“regression”と区別して“retrogression”とよんでいる (Lewin, 1941)。いずれにせよ人が形見に対して抱くアニミズム的な感覚は、喪失のストレスにより一時的な退行現象が生じている状態と解釈できるであろう。

以上、本項では形見に関する池内（2005a, 2005b, 2006）の実証研究結果を中心に考察してきた。それにより、人が形見を擬人化したり、故人の一部とみなしたりする理由として、喪失体験→極度のフラストレーション（ストレス）→一時的な退行現象→アニミズム精神の生起、といった関連図式によって説明可能であることが論じられた。それゆえ今後は、形見の心的機能に関してさらなる検討を加えるとともに、この仮説モデルの検証も課題の一つとしたい。

#### 引用文献

- Beaglehole, E. 1932 *Property: A study in social psychology*. New York: Macmillan.
- Bowlby, J. 1961 Processes of mourning. *International Journal of Psychoanalysis*, 42, 317-340.
- Dittmar, H. 1989 Gender identity-related meanings of personal possessions. *British Journal of Social Psychology*, 28, 159-71.
- Dittmar, H. 1991 Meanings of material possessions as reflections of identity: gender and social-material position in society. In Rudmin, F. W. (Ed.), *To have Possessions: A Handbook on Ownership and Property. Special Issue of Journal of Social Behavior and Personality*, 6, 165-186.
- Dittmar, H. 1992 *The social psychology of material possessions: To have is to be*. UK: Harvester Wheatsheaf, St.Martin's Press.
- 8.12連絡会 2005 西雲総集編：日航機御巢鷹山墜落事故遺族の二〇年 本の泉社
- Harvey, J. H. 1996 *Embracing their memory: Loss and the social psychology of storytelling*. Needham Heights, MA: Allyn & Bacon.
- Harvey, J. H. 2002 *Perspectives on loss and trauma: Assaults on the self*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications. (和田 実・増田匡裕編訳 2003 喪失体験とトラウマ：喪失心理学入門 北大路書房)
- Harvey, J. H., Flanary, R., & Morgan, M. 1986 Vivid memories of vivid loves gone by. *Journal of Social and Personal Relationships*, 3, 359-373.
- 平山正実 1997 死別体験者の悲嘆について：主として文献紹介を中心に 松井 豊（編）悲嘆の心理（pp. 85-112）サイエンス社
- 池内裕美 2005a 喪失対象との継続的關係：遺品や思い出の品の意味・機能の検討を通じて 日本グループ・ダイナミックス学会第52回大会論文集, 162-163.
- 池内裕美 2005b 喪失対象との継続的關係形成プロセスの検討：修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる定性的分析 日本社会心理学会第45回大会論文集, 410-411.
- 池内裕美 2006 喪失対象との継続的關係：形見の心的機能の検討を通して 関西大学社会学部紀要, 37 (2), 53-68.
- 池内裕美・藤原武弘 2002 対象喪失による心理的過程：回復期間に影響を及ぼす諸要因の検討 日本社会心理学会第43回大会論文集, 526-527.
- 池内裕美・藤原武弘・土肥伊都子 2000 拡張自己の非自発的喪失：大震災による大切な所有物の喪失調査結果より 社会心理学研究, 16, 27-38.
- 池内裕美・中里直樹・藤原武弘 2001 大学生の対象喪失：喪失感情、対処行動、性格特性の関連性の検討 関西学院大学社会学部紀要, 90, 57-71.
- イザヤ・ベンダサン（山本七平）1979 日本人とユダヤ人 山本書店
- 木下康仁 1999 グラウンデッド・セオリー・アプローチ：質的実証研究の再生 弘文堂

- 木下康仁 2003 グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践：質的研究への誘い 弘文堂
- 小島操子 1991 末期患者の近親者の悲嘆への援助 ターミナルケア, 1, 375-378.
- Kübler – Ross, E. 1969 *On death and dying*. New York: Macmillan Company. (川口正吉 (訳) 1971 死ぬ瞬間：死にゆく人々との対話 読売新聞社)
- Lewin, K. 1941 Regression, Retrogression, and Development. *University of Iowa Studies in Child Welfare*, 18, 1-43.
- 松井 豊・鈴木裕久・堀 洋道・川上善郎 1996 日本における災害遺族の心理に関する研究の展望 2 聖心女子大学論叢, 87, 41-66.
- 村武精一 1997 アニミズムの世界 吉川弘文館
- 新村 出 1998 広辞苑 (第五版) 岩波書店
- 小此木啓吾 1979 対象喪失：悲しむということ 中公新書
- 小此木啓吾 1997 対象喪失とモーニング・ワーク 松井 豊 (編) 悲嘆の心理 (pp.113-134) サイエンス社
- Piaget, J. 1964 *Six études de psychologie*. Genève: Gonthier (滝沢武久訳 1968 思考の心理学 みすず書房)
- Winnicott, D. W. 1971 *Playing and reality*. London: Tavistock Published Ltd. (橋本雅雄訳 1979 遊ぶことと現実 岩崎学術出版社)
- Worden, J. W. 1991 *Grief counseling and grief therapy: A handbook for the mental health practitioner* (2nd edition) . New York: Springer. (鳴沢 実監訳 1993 グリーフカウンセリング：悲しみを癒すためのハンドブック 川島書店)
- Wortman, C. B., & Silver, R. C. 1989 The myths of coping with loss. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 57, 349-357.
- 山本 力 1991 対象喪失の様態とその位置付け 岡山県立短期大学紀要, 34, 1-8.